

古代文学に制度論という概念を持ち込んだ一人として呉哲男は、既に制度論的な立場からの研究のいくつかを公にし、それらは高く評価されているのだが、今回の発表に限っていえば、制度論を持ち出さねばならない根拠がどこにあるのか、という点が討議で最も問題になったところである。あるいは、「国家の確立」を言わなくてはならないのはなぜか、という疑問も同じことだといってよいだろう。それに対して呉は、一部によりかかっていたがらすべてを統括できる視点として制度論はあるのだとか、「原<sup>たすね</sup>れば……」（欽明紀）という歴史意識は国家を前提としなくては出てこないのだとか答えていた。しかし、これだけでは十分な説得力はもたない。たぶん、呉の発想の根底には、書かれて残された記紀神話を超えて神話を想定することへの懐疑があるはずで、そうみれば、制度論が提出されてくる必然性は理解できる。しかし、そうだとするならば、発生論や様式論への批判を明確に示す必要があるだろう。

### ※

三時間を超す討議（報告を含めると四時間半を超している）の総括としては不備な紹介だが、討議では、三人の三つの方法論に対する報告をもとに、それぞれの方法論のもつ問題点はかなり明らかにされたと評価してよいと思う。そして、それぞれの方法論が向かおうとする方向もそれなりに明らかにされたと考えてよい。しかし、今回のセミナーで明らかにしようとしたもう一つの問題、それぞれの方法論相互のつながりと断絶については、我々の期待通りには、明確にならなかった。とくに、神話を対象とした発表と討議は、題材の選択ミスという面もあって焦点が絞り切れなかったことに原因していることも大きいと考えられる。また、発表者自身にとって、テー

マとして与えられた方法論が絶対的な立場となりえていないという側面も見逃せない（それは発表者の責任ではなく、そういう立場で報告することを押しつけた企画の問題があるといえる）。そして、その分だけ他の方法論が明確に対象化され得なかったため、発生論と様式論、制度論と発生論、様式論と制度論といった相互の関係が、討議を通して今一つ鮮明にらえなかったのではないかと考えられる。

五年間のシリーズ・セミナー合同企画の総括のすべてを果しえたか否かは疑問だが、今後の古代文学研究が向かうべき方向を考えてゆく際の、一つの契機となりうるであろうことは間違いない。常に方法論を確認しつつ研究が進められるべきだということを、五年間の活動は、我々に教えてくれたのである。（三浦佑之）

### 「奈良社伝承」を通して

### 発生論から

近藤 信義

風土記の神話を考えるとき記紀撰定によって必然的に序列化されてしまう地方の神々のあり方へと眼が向いてしまう。奈良社伝承は逸文であり古風土記としての資料性に問題はあるが地方神話の一つの方法が拓かれているのではないかと見ている。この伝承は逸文丹後国風土記に見られる奈良社起源譚である。譚は前後に分かれ前段は天女とワナサ夫婦とのつながり、後段は天女の流浪と奈良社の縁起という構成をもつ。前後を分つのは天女に対するオキナ夫婦の態

度の変化にある。前段では比治山の真奈井で水浴中の天女の衣を取り蔵したオキナが「吾は児なし……汝児となりませ」と迎えておきながら富を得るや後段では「汝は吾が児にあらず、暫く借りに住めるのみ。早く出できね」と天女の流浪を運命づけていく。この譚の要素には竹取翁が娘を得た後、次第に富裕になっていく竹取物語や、住吉明神の申し子としてこの世に生まれ出た子が十年を経ても背丈が延びずついに両親にうとまれて旅に出てゆく一寸法師の話などと共通性を見せる。文学史的には説話的世界の門口に立っているといえるだろう。

奈具社伝承を話型から見ると前段は羽衣伝説(天人女房譚)の変型と見られる。むしろ古文献中の典型としては伊香の小江(逸文近江国風土記)があげられる。天女が山の泉、湖に水浴中その衣をかくし妻とし、子を成すという話は氏族の祖神を語る伝承としての性格を見せていく。後段は神社起源譚だが、こうした起源譚(地名なども含む)の様式的特徴は貴人や神がさすらいつつ、その鎮まる地を得て讚め詞を発するというところにある。例えば垂仁紀二十五年の倭姫命は天照大神を奉じて鎮座の地を求め、各所をめぐってついに伊勢国へと導かれる。この地を教えた天照のことばはまさに讚詞である。天女が荒塩―哭木―奈具とたどって遂に「此処にして我が心なぐしくなりぬ」といったとあり、鎮まるべき地を讚める様式が等しくとり出せる。或は又トヨウカノメⅡ穀霊神を齋き持って各地をめぐる信仰集団を想定(民俗学の方法によるが)してこの伝承を見取することも可能だろう。

奈具社伝承は右のように異った要素を持つ二つの話型が一つの伝承譚としてつなげられていると見得るわけだが、その両者のつながり

りは天女であるところの主人公の示す性格が巫女的であるということに全てがよっているのだろう。後段に巫女的性格を見出すことはむしろやさしいが前段も、聖なる女のミソギと聖婚といった祭式の秘儀的習俗がとらえ返されて物語化しているに違いなく思われる。

しかし祭式からの論理が川を溯った井や湖の聖地までとどくことは了解しつつも、その聖なる女が天から飛来せねばならなかったのはなぜか。天の羽衣を着た天女が地上に飛来するという想像力は古代の我が国のもものではなかったようだ。語り伝える伝承集団の存在を認めつつ、まして民間伝承の広範囲の分布に存在感の重さを認めつつも、奈具社を含めてなぜ起源譚に羽衣説話を結びつけたのか、或は結びつくのか。風土記を含めて以後の地方神話、起源譚の方法へとつながらないのか。

参考、三浦佑之「天人女房譚考―奄美を視座として」奄美沖繩民間文芸研究。国文学解釈と鑑賞80年12月号。

### 「奈具社伝承」を通して

## 様式論から

野田 浩子

この伝承は様式論の立場から〈散文の道行〉をおさえられる。  
1 〈散文の道行〉 〈地名起源伝承〉を連ねたものをかくいう。

風土記地名起源伝承は多く神の呪言や鎮座に由り、その神は〈巡り来る〉と語られる。これらは地名に神の守護を見る地縁共同体内のもので、より原初的には〈遙かに〉やってくる神である。他の世界(共同体外の、異界ではなく地上的な)が意識されて始めて、神は巡り来る